

## 令和6年度第2回鎌倉市総合教育会議 議事録

- 1 開催日時 令和6年(2024年)12月18日(水)午後1時10分から午後2時30分まで
- 2 開催場所 鎌倉水道営業所2階 会議室
- 3 出席者 松尾市長、高橋教育長、下平教育委員、朝比奈教育委員、長尾教育委員、林教育委員
- 4 関係者 共生共創部長、教育文化財部長、教育文化財部次長
- 5 事務局 共生共創部企画課長、企画課担当係長、企画課主事、  
教育文化財部次長(兼教育総務課長)、教育総務課課長補佐、教育総務課担当職員
- 6 傍聴者 9名

【市長】本日は御多忙の中、お集まりいただきましてありがとうございます。ただ今から、令和6年度第2回鎌倉市総合教育会議を始めます。

本日は教育大綱の策定に向けた取組状況について御議論していきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

そして、傍聴にお越しいただきました皆様、ありがとうございます。会議の傍聴につきましては、鎌倉市教育委員会傍聴規則を準用いたします。皆様の御協力をお願いします。

それでは、まず事務局からお願いします。

【事務局(企画課長)】共生共創部企画課長の安富です。本日の配付資料ですが、次第にあります3種類の資料となっています。資料1育大綱の検討状況について、資料2教育大綱(案)、資料3(仮称)第4次鎌倉市総合計画の全体像についての3種類となります。

ご確認をお願いいたします。

続きまして、会議の運営にあたってのお願いです。御発言に当たりましては、マイクの使用に御協力いただきますようお願いいたします。

事務局からは以上です。

【市長】それでは、次第に沿って進めたいと思います。

「教育大綱の策定に向けた取組状況について」、事務局から説明をお願いします。

【事務局(教育文化財部次長)】本日説明させていただきます観点が4つございます。

1点目は、教育大綱の検討状況について、そしてその検討状況を踏まえた2点目、教育大綱案を本日お持ちしてございます。

そして3つ目が今回教育大綱を定めていくにあたって、その上位計画にあたります総合計画、下位計画にあたります現状の教育プラン等の整備について説明いたします。そして4つ目が今後の進め方、スケジュールとなります。進め方としましては1点目、2点目そして3、4点目を合わせて議論をしていきたいと思っております。それぞれのディスカッションポイントを資料に記載していますので、それぞれのタイミングで委員の皆様からご意見を頂戴できれば考えています。

それではまず、教育大綱の検討状況といたしまして、検討状況の中では2点ご説明いたします。

検討状況につきましては、議論の経過と鎌倉市教育データのご紹介というのをさせていただければと思っております。今回の総合教育会議は6月以来の開催となりますけれども、それまでも個別のご相談も含めて、多種多様な場面でこの教育大綱について議論するとともに、その検討状況について周知説明を進めてきたところでございます。

4ページをご覧ください。2023年7月の総合教育会議からこの議論がスタートいたしまして、教育委員会の事務局の中でも議論、教育委員会定例会そして学校現場の小・中学校の管理職や先生方、そして2024年5月には「こどもみらいミーティング」として子どもたちともディスカッションを重ねながら、今回この教育大綱の議論というのを進めてきたところでございます。

そして本日2024年12月にこの総合教育会議で教育大綱の案について議論をさせていただきまして、今後、1月または2月の総合教育会議を経て策定という流れになっていきます。

ここまでの議論の経過というのを踏まえると、前回の総合教育会議では、このグランドデザイン全体像と案をご提示したところでございます。その中では炭火というのがおそらくビジョンになるのであろうということでした。それぞれ柱立てに、ワクワクであったり、あるいは地域の宝物を活かした学びに行ってきたりとか、いくつかの柱があってその柱ごとにアクション、具体的な施策的なものが紐付いていくそのようなイメージであるということまで皆様のディスカッションを元に具体化させていただいたところでございます。この後のアジェンダの中では、その初期案をお持ちしてございますけれども、これをさらに具体化していくにあたって、鎌倉市の教育データについて一部ご紹介させていただければと思います。

先ほどの例えばワクワクした学習者中心、あるいは地域の宝というところは、7ページをご覧ください。例えば、元々鎌倉市の中学生は結構学力が高いということや、一方で全国と同じようなトレンドで不登校児童生徒が増えているということや、様々な状況を踏まえながら、これらのキーワードというのをこの総合教育会議の議論を通じて紡ぎ出してきたところでございます。これらのデータについて一部アップデート等もございまして、まずアジェンダ1としまして、そのご紹介までを終えてディスカッションパートに入らせていただければと思います。

まず令和6年度全国学力学習状況調査についてです。今からお示しするデータは、教育委員会等でもお話ししたデータの一部抜粋となっております。年内には、ホームページ等でも公表しますので傍聴者の皆様もぜひそちらもご参照いただければと思います。一部かいつまんだ形で説明をさせていただければと思います。

まず9ページが全体のいわゆる全国平均、神奈川県平均との比較でございます。学力自体がその平均と比較するのがどうなのかという議論もある中ではありますが、一定の目安としてというところでいきますと小中学校ともに鎌倉市はかなり学力が高い位置づけにあるかなと思ってございまして、小学校国語を除きまして中学校数学国語そして小学校算数全てにおきまして全国、そして神奈川県平均を上回る状態となっております。

小学校国語が下回っている部分あるいは県平均と同程度になっている部分が気になるころではございますけれども10ページをご覧ください。一番下の水色が小学校国語のこれまでの標準化得点の推移となつてござ

いまして、一定標準化得点としてどれくらい全国と差が開いてきたのかというところでは、平成 31 年と比較すれば、少しずつ上昇傾向に見られるというところから小学校国語についても、元々鎌倉市の子どもたちが一定苦手であるものの小学校における話すこと聞くこと書くこと読むことにおける日々の言語活動の成果が少しずつ現れてきている状況なのかなというのが受け取れると考えてございます。

11 ページをご覧くださいと、主体的対話的で深い学びの実現に向けた授業改善ということで主体的対話的で色々な議論をするような協働的な学びとってというのが行われていますかというのを子どもたち自身に聞いてみても、他の全国や神奈川県と突出して、そういう授業が多いと答えている子どもが多いというところがございます。

こちら他の自治体で聞いてみますと頑張っているつもりでもなかなか上がらないというような自治体もあるものの、鎌倉市においては、子どもたちが認知できるほどに、主体的な対話活動というのが増えているというところで、そういうところが先ほどの平均得点を少しずつ押し上げている一定の要因になっているのではないかと考えてございます。

一方、12 ページですね、こちらの全国平均より少し低いとなっておりますが、授業における ICT 活用の状況というところでは、右側、中学校の ICT 活用の状況というのはかなり進んでいるというところで、当てはまると思う、毎日のように使っていますという回答している子どもが、全国平均3割程度に対して中学校は5割となっております。

一方で小学校につきましては毎日使っているところが全国平均 25%、神奈川県3割程度に比べて半数程度の 12.5%になっているというところで、小学校での ICT の積極活用というところをより検討していく必要があるというところがございます。

こちら教育委員会でも議論になりましたけれども、この数字をただ押し上げるということが目的化してはいけないというところがありつつも、この数字を見ながらどういうところで ICT をより活用していけば、主体的で対話的で深い学びという学習指導要領の本旨に沿った事業が展開できるのかというところをより議論していく必要があるのかなと考えてございます。

13 ページでございます。困り事や不安があるときに先生や学校にいる大人にいつでも相談できると答える子どもというところで、こちらも少し全国平均より低くなっているというところがございます。こちらは、鎌倉市としても子どもたちがいつでも相談できるところ、先生と子どもの関係もそうですし小学校外の居場所というところをしっかりと整備していく必要があるというところが教育委員会でもそうですし、先日の教育福祉常任委員会においてご議論いただいているところでございます。

学校に行くのは楽しいと答える子どもというところにつきましては、全国並みの数になっているというところで、やはり学校自体を楽しんでいると思っているのは鎌倉市においても、しっかり見るというところと、あるいは勉強が好きと答える子どもというところは全国平均よりも少し高いような推移をしているというのが 15 ページでございます。

一方鎌倉市は、全国平均に比べて好きと答える子どもも多いが、好きというのが当てはまらないという答える子どもも多いことでやはり一人ひとりに個別最適な学びというのが求められているというのがこちらでも見てとれる状況でございます。

あるいは、16 ページ自分には良いところがあると思っているところで、こちらが全国に比べて突出して当てはまると答えている子どもが高いところで、ウェルビーイングに対する好感度を感じている子どもも一定数多いと考えています。

そして 17 ページ、こちらが少し面白い結果になっていますが、いじめはどんな理由があってもいけないと答える子どもというのが全国平均に比べて少し低くなっているというところがございます。こちらについては教育委員会

や教育福祉常任委員会でも様々ご議論いただきまして、まず、いじめはどんなことがあってもいけないと、そういう指導をさらに道德教育でしたり、様々な場面で指導していくことは重要であるというところを確認しながらも教育福祉常任委員会でもご議論いただいたのが、鎌倉市の子どもはこの設問をすごく深く読み解こうとした結果「どんな理由があっても」というところを重たく受け止めすぎて当てはまる、100%そうだというのが、なかなか答えづらくてどちらかという当てはまると選んだ子どもも多いのではないかというご意見いただきました。確かにどちらかという当てはまるまでを見るとほぼ全国平均になるというところで、この当てはまるが単純に低いということをもって当てはまるを上げていく指導をすべきだという安直な話ではなくて、こうしたところを読みとりながら様々な場面で、いじめはどんなことがあってもいけないということを伝えていく、そうした指導が重要であるということを確認したところでございます。

また令和5年度児童生徒の問題行動等不登校調査についてご説明させていただきます。こちら2つほどデータピックアップしておりますけれども、まずコロナ以後いじめの認知件数も急激に増えているという状況でございます。こちらの認知件数でございますので、文部科学省の指導におきましても、この認知件数自体はむしろ上がっていることをもって駄目というわけでは全くない。むしろ積極的に認知をしてほしいというように文科省から指導が全国に行き届いているところでございますので、教育委員会、学校現場の皆様が、いじめというものを積極的に認知して個別にしっかりと支援をしていった結果、認知件数が増えているという状況にあるのかなというところでございます。

一方で、やはりいじめは絶対にあってはならないという前のデータとも重なり合わせる通り、1件1件しっかりと丁寧に対応していく必要があると考えてございます。

また20ページでございますが、不登校児童生徒の数というところでいきますと、やはり全国、神奈川県そして鎌倉市全てにおいて同様のトレンドを以って伸びてきているというのが現状でございます。特にコロナ以後ですね、令和元年度、令和2年度以降伸びていくということが実態上でございます。鎌倉市だけ見ますと、不登校というのが数%程度になっておりまして、1人、2人、3人ぐらいの動きで乱高下してしまうので中学校で少し大きな動きをしているところがございますが、大きなトレンドとしてはやはり増えてきているというところで、一人ひとりのニーズに沿った教育の必要性というのが高まってきているというトレンドが見てとれるかなと思います。

こうしたここまでの鎌倉市のデータをしっかりと読み解きながら、それを教育大綱にどう落としていくのかというのを、改めてディスカッションを深めさせていただければと考えてございますし、あと2つほどデータをご紹介させていただきますと21ページから約3ページにわたりまして、その他国際調査についてもご紹介させていただければと思います。

こちらは、国際調査ですので鎌倉市問わず全国的なトレンドになりますけれども、インプットになるものとして抜粋してご紹介をさせていただければと思います。

まず、TIMS2023の結果というところで、国際教育到達度評価学会 IEA という団体が理系、すなわち理科や数学算数の学びについて学力テストを実施して、あるいは他のアンケート調査とクロス分析をしながら全国全世界の理系教育というのがどういうふうになっているのかというのを把握しているものでございます。

こちら左側ご覧いただきますと、やはり日本の平均得点は、かなり高い水準で引き続き推移をしているというところでございます。一部の評価項目において、前回から下がっている部分というのは全国的に見てありますけれども、例えばその項目については、学習指導要領上は中学校で扱うことになっているものが、小学校で出ていたりだとかその取材範囲の傾向によって、少し日本ではここを解くのが難しかったのかなというところも一部あったりするところと特に中学校のところについては一定の水準を保っているという分析結果が出ているところとござ

います。

また、右が日本の平均、児童生徒が ICT を活用する自信があるほど平均得点が高いという傾向が出ておりまして、やはり特に理数系の学びと ICT の学びというところは親和性が高く、ICT を使って自分で学んでいけるというまさに自分で学んでいく力がある子どもは理系教育や、理系の学力テストで高く出ているのかなという傾向が見られていると思います。

また 23 ページでございますけれども、こちらは PIAAC と呼ばれている OECD 国際成人力調査というものでございます。こちら冒頭のキーマッセージも書かせていただきました通り、教育レベル全体中長期的にやはり高い水準を保っているというところが、左側の2つのデータから読み取れます。PIAAC というのは 16 歳から 65 歳までの成人を対象としまして、成人の社会生活で求められるスキルを読解力、数的思考力、問題解決力という3つの軸で調査をしているというものでございますが、全てにおきまして日本はトップ3に入っていて2位2位1位という状況になってございます。かなり高い水準であるという状況でございます。また、少し左下のレベル1以下の割合というところが注目ポイントでございます。読解力と数的思考力は6段階で問題解決力というところは5段階で調査をしているというところでございますが、その中の一番下のレイヤーにいる人たちというのが日本は最も少ないとされています。すなわち、教育格差としていわゆる落ちこぼれというか、学校の授業について行けなかった子どもの割合みたいなどころ、取り残された学習者というのが少ないと言えるというところでございます。

また、こちらの全体の学力が高いというのは平均でございますけれども、右側を見ていただきますと、これは、16 歳～24 歳、25 歳～ 34 歳、その 10 年後とどの階層をとっても OECD 平均を大きく上回る平均点を取っているというところから、やはりどの学年においてもその基礎学力をしっかりと身につけていくという教育においては、かなり日本の教育の成果が出ていくのであろうというところでございます。

一方で、一部報道でも指摘をされているのですが、この 16 歳～24 歳の成績から日本はもう完全に減少傾向になっているということに対して、OECD 平均は、25 歳～ 34 歳は上昇傾向にあるというところもございまして、日本においては大学や高校出たからの学び直しや、あるいは学習を継続していくというところが弱いのではないかとという指摘が一部報道ではされているというところなんです。こちらについては、鎌倉市の教育大綱としても炭火をキーワードとしていますけれども、その学び続ける力というところがより求められている一つの証左なのではないかというところでございます。

ここまでがこれまでの教育大綱の議論の経過と鎌倉市教育を取り巻く現状のデータの最新情報というのを伝えさせていただきました。

25 ページご覧いただければと思いますけれども、ディスカッションポイント1つ目といたしまして、これまでの議論の経過や、鎌倉市の教育を取り巻く最新の状況を踏まえて、ご質問やご意見あるいはご感想、改めてこの教育大綱への決意等ありましたらぜひお聞かせ願えればと考えてございます。

**【市長】**ありがとうございました。

教育委員会は今までもずっと議論されてるところだと思いますけれども、一旦ここで立ち止まりながら、ここまでの感想ですとか、改めてご質問等あればお願いできればと思います。

**【教育長】**説明ありがとうございました。まず、教育大綱に向けた議論は3つのパートが私あるとあって、1つは現状をちゃんと押さえる。2つ目としてあるべき姿を描くということ。現状とあるべき姿の差分が必要なアクションになります。これが3つ目です。

今日議論するのは、アクションまでは至らないですけれども、天井の部分とあるべき姿というのを今日議論できればと思うので、現状の議論は今ご説明いただいた通りです。今日は時間の限りもあるので、全てのデータを紹介しているわけではございませんけれども、少し鎌倉の子どもたちにとって特徴的なデータなどご説明させていただきました。

ポイントとしては簡潔明瞭に示していくということと、やはりエビデンスで語っていくということが大事だと思います。これをまず足場にして、次のパートであるべき姿をまた議論できればなと思っています。これまでも教育委員会で議論してきたことと重複もあると思いますが、総合教育会議という場では、初めての議論になるので、これまでの振り返りも含めて少しご意見などいただければと思います。

**【林委員】**今までの振り返りというところで、聞かせていただきました。長いこと教員生活をして学校教育に関わっている者としては、正直なところ、昔とそんなに変わっていないというのが私の考えです。やはりこれからの未来に向けて、言葉や整理の仕方、これからの教育に繋げていく、つまり今までのものを否定するとかそういうものではなく、今まで培ってきたものを、これからの子どもの教育に当てはまるように、先生方が身近に感じられるように、昔話で終わらずに、過去のを未来に引き継ぐという、そういうものだろうなという思いで、見させていたいています。

特にグランドデザインの全体像のところは、私の感想としては自分たちが教員時代にやってきたことがきちんと4つに整備されたという感覚が非常にあります。今までの教育の良かった部分をぜひ未来に繋げてほしいという願がありますので、ぜひこの形で今の先生方にやってみようとなるわかりやすい文言で整理していただければと思っています。

**【長尾委員】**このデータを含めて何度も見させていただいており、教育委員会の方でも質疑をさせていただいていますので、データのところににつきましては、今日は申し上げるつもりはありませんが、1点 13 ページにあります、困り事や不安があるときに先生や学校にいろんなラインでいつでも相談できるという回答が少し平均よりも低いですというお話がありましたけれども、非常に先生方と学校の関わりも変わっていったと同時に、今後はそのコミュニティや、家族全体で子どもを支えていくという風潮を、より鎌倉が強くなっていくことが求められているのではないかなと思っています。子どもたちが学校だけにとらわれずに地域の大人、地域の周りに住んでいる方々に悩みや相談できる環境というものを作っていけたらいいのではないかなと思っています。

**【下平委員】**2023 年の7月の総合教育会議以前から話し合いを続けておりました。前回の教育大綱を作ったときから、家庭の状況、社会の状況が大きく変わっています。子どもよりもむしろ大人たちが、取り巻く社会が変わらなければいけない時が来ていると思います。そういう意味で今回話し合いの中でも、後の説明でもあると思いますが、小中学校だけというとらわれでなく、生涯にわたって、私達大人も学び成長していく、変化していくんだというような、教育大綱にしたいという思いを強く持っております。

**【朝比奈委員】**先ほどのいろんなデータですけれども、これを見ると要するにアンケート調査的なことですから、尋ねられた児童生徒が、自信を持って僕は学校が好きだとか、当てはまると言える。ここが鎌倉市は多いのか少ないのか、でもどちらかという真ん中辺かなという曖昧なことになりがちな児童生徒が多いのか、そこをもっと自信を持っていいものはいいと腹をくくって言えるような子になるような環境を我々が整えていく責任があると思います。

私が小学生のときに何か尋ねられたら、果たして自信を持って言えただろうか、そこは反省も含めこれからの課題だなと感じております。

**【市長】**ありがとうございます。これまでの取組で見えてきた部分でお話をさせていただきますと子どもたちのワークショップを行った際に、一部の子どもではありますけど、参加した子どもたちがもっと自分たちがやりたいということを実現していきたいと様々なアイデアがたくさん出てきました。彼ら彼女らがとても楽しそうにこれからの学校を考えてくれている姿を見て、やはりそういう力を本当に伸ばしてあげたいなと感じました。また、私も時々学校訪問に行くと、すごくこれをやりたいって SDGs の取組もこれも7、8年前になりますけれどももっとやりたいということで、意見を取り込んだりということでの取組をやれて、そうやってもう火がついている子どもたちを本当にどんどん伸ばしてあげられたらなというのは根底としてあります。

一方で火がついてない子も当然いるという状況の中で、先般、芸術館でそういう取組のお話聞かせていただいて、先生はやりたいことやれと言うけど、俺にはやりたいことなんてないんだよと言う子がいた際に、先生の取組方、本当に時間をかけてしっかりその子と向き合いながらやるということが本来そうあるべきと思う反面、やはり、一人ひとりに対してどこまでそれができるのか、まさにギャップの部分だったりするのかなと思ったときに、これだけの不登校が増えているということも含めて、我々一人ひとりの火をつけ、つけられるその火のつき方は、それぞれだと思いますので、簡単には言えませんけれども、しっかりとこの教育大綱の中で方向性を示していくということが大事だと感じたところではあります。そのため、そうしたことがぜひできるような教育大綱にしていきたいというふうに思っています。

**【教育長】**市長のおっしゃる通りだなと思うので少し補足的にお話します。データ上も SWOT 分析のスライドもありましたけれども、本当に鎌倉の子どもたちは、やはり表現するのが得意で好きで、自分にいいところがあると思える子が多いです。まさに市長がおっしゃった姿というのは、平均値としてはその通り。

ただ今日紹介したデータは、基本平均値です。これは平均というか私は分散の方が大事だろうなと思っていて、それは一人ひとりの子どもたちのことに焦点を当てていくというような考え方です。そのため、データの見方も我々さらに深めたいと思いますけど、平均が鎌倉の子どもの学力が高いからいいとそこで終わってしまうのではなくて、どう我々の施策が学習者中心の学びというところに寄り添っていけるのかというのを後半戦であるべき姿として語っていただければと思います。

このあたりのデータは、平均値で、中央値平均値で語られるので、そこで留まっている限りは子どもたちが本当の姿がなかなか見えてこないというところだと思っています。そこを我々も踏み込んでいきたいなと思っております。そういう意味でも分散もですね、少ないです。なので、ある意味ではそういう意味ではあまり取りこぼしをしていないという意味では、優れた部分があると先ほど朝比奈委員がおっしゃっていて、面白いなと思ったのがいくつか PIAAC や TIMSS という OECD の調査がありましたけれども、今回の PIAAC のレポートで、面白いなと思ったのが、東アジアの子どもたちや大人たちというのはあんまり飛び抜けたところに丸をつけないという控えめな傾向があります。全体が控えめになると平均値にも影響してくる話なので、総じて鎌倉の子どもたち含めて言えることなのかもしれないなと思って、ご紹介でした。

**【市長】**ありがとうございます。では、引き続き事務局から説明をお願いします。

【事務局(教育文化財部次長)】皆様ご意見ディスカッションありがとうございました。今の議論を踏まえながら教育大綱をさらに具体化していくところで、教育大綱の案について具体的に事務局として形にしていきましたのでその概要やその中身についてご説明させていただければと思います。

前回、炭火をキーワードにしていくということや、柱を立てながらアクションを具体化していくところまでが具体化してきたところでしたが、ディスカッションの中で炭火というのをもっとわかりやすく伝えるためのビジョンにするためにはどうしたらいいかということで、この四つの柱の関係性が、少し成熟化が必要だろうということが、ご意見等ございましたので、まず大きくそれらを修繕してきたということとさらに具体化を進めたということとでございます。

教育大綱については、まず概要版として1枚のこれさえあれば、まずは全体像がわかるというものを用意するとともに、全体版の教育大綱といたしまして、それぞれ目指す姿やコンセプト1一つ一つの言葉に込めた想いを詳細に言語化するものと大きく二つの構成を考えてございます。

まず、概要版についてご説明します。30 ページをご覧ください。まず、教育大綱全体の構成としましては、大きくはシンプルに目指す姿と、それに向けた行動指針コンセプトという形にしております。何を目指すのか、そしてそれに向かってどんなことを頑張っていくのかということ、具体化したということとでございます。

そして大きな構造としては、ビジョンは炭火のごとく誰もが学びの火を灯し続け生涯にわたり心豊かに生きられるまち鎌倉というところをビジョンとして位置づけてございます。この炭火というキーワードを一番に置きながら、子どもたちあるいは大人も含めて全学習者の一人ひとりの心に学びの火が灯っている状態、そしてそれが燃え続けている状態というところを目指していくということとでございます。それを実現していくためには、どういうコンセプトで、我々は努力をしていくのか政策を打っていくのかということ、一番中心に据えているのが、学習者中心の学びというものでございます。やはり、一人ひとりの心に火をつけていこうとすると、無理やり何か教え込むや火をつけようとするのではなく、一つ一つの炭の中から、じわりじわりと内発的な動機に基づいて、その学びの火が灯されていく状態を作っていくとけない。そうすると教師や行政が主体となって何かを教えるのではなく、学習者を中心とした学びを実現していく必要があるだろうということとでございます。そして、その学習者中心の学びを構成するために、四つの柱を設けています。

こちら前回と構成が変わっていますので、ご紹介しますと一つがワクワクする未来を創る学び、そして二つ目が地域の宝物を活かし、生涯をかけて学ぶ機会を作るというもの。そして三つ目が多様性を尊重した学びで共生社会を共創するまさに男女参画、人権問題、あるいは様々な共生社会というのを求められていく中でのその共創していくための学びということとでございます。そして四つ目が学習者中心の学びを支える環境整備というところで、一つ目から三つ目の学びを実現していくためにも学校の運営体制、指導体制、教育環境あるいは生涯学習基盤というのをしっかり整備していくという中で、この四つの大きな柱に基づいて政策を推進していくものであり、それぞれこの黒字で書かれている一つ一つの粒というのがもう少し具体的な施策分というところで位置づけているとでございます。

教育大綱の案ということで全体像を説明させていただければと思います。こちらの紙はできるだけ想いを言語化することを目的としてございます。

まず目指す姿ビジョンからご説明させていただきますが、記述については先ほどお話した通りでございます。ビジョンをイメージ的にイラスト等も挿入していきたいと考えてございます。そして、炭火という言葉自体がそれだけではなかなかわかりづらいというところから炭火という言葉に込めた我々なりの思いというのを言語化してございます。やはり炭というのはなかなか火がつかない、火をつけるには巧みな環境設定が必要であるけれども、1度火が

灯るというところで、三つの要素を言語化しています。一つが、持続性。炭は燃え始めると燃え続けるし、さらにふっと息を吹きかければ、瞬く間にまた燃え上がるという性質があるというところで先ほども PIAAC のデータを示しましたけれども受験勉強や一時の資格勉強のときのためだけに一時期勉強して、それで全て終わりということではなくて、大人になっても、じわりじわりと思いつけるような学びの火を灯していくことが重要であるということ。また多様性でございますが炭の形自体が多様で、その炭一つ一つの燃え方があるというところをしっかりと見取りながら、学習環境を設定していく必要があるというところ。そして三つ目が伝播性というところで一つ火が灯ると、炭はどんどん周囲が炭を広げていくというところで、やはり学校やあるいは生涯学習の場面で、一つの灯った火がどんどん伝播をして大きな火になっていくというような形で、伝播していくような学びの火を灯していきたいというところを、思いとして込めてございます。このような持続性、多様性、伝播性を持った炭火のような学びが、実現できていくための方法としてコンセプトというのを言語化してございます。

やはり一番重要なところとして置いているのが、この学習者中心の学びというところで、この学習者中心の学びを実現していくことで炭火のような学習者を生んでいきたいという構成になってございます。この学習者中心の学びというのは何なのかということも、言語化に挑戦しているところでございます。

まず一つは、個別最適の視点というところで、学習者の個性が活きる学びができていくのか、そして二つ目が自己決定の視点、学習者がただただ何かコンテンツを与えられて学ぶのではなく、主体的に自らの興味や関心あるいは自分でやりたいという気持ちに沿って、学びをデザインできているのかというもの。そして三つ目が、未来への先行投資の視点というところで、やはりその学習者が炭火のように学び続けられるための支援を教育委員会、行政全体としてできているのか、そのための環境整備ができているのかと、この三つの視点にとって我々は常に政策を推進していくというところで今後、教育政策を実行していく際には、どんな政策がいいのか考える際には、個別最適になっているのかあるいは自己決定ができるようなデザインになっているのか、そしてしっかりと今、未来への先行投資ができているのかという視点を思っただけで教育政策となっていくための言語化をここでさせていただいてございます。

では、このような視点を持って学習者中心の学びというのをもう少し具体的にどのように進めていくのかというところが先ほどご説明した四つの柱というところでございます。こちら柱については、大枠はご説明した通りでございますが、この柱については 10 ページ以降で一つ一つ少し具体化してございますので、こちらもかいつまんでご説明させていただければと思います。

まず、ワクワクする未来を創る学びを生み出すというところについては、やはり取組の方向性として、探検をするかのように学習者のワクワクを引き出していくというところで、こちらのそれぞれの柱においては、方向性を言語化するだけではなくて、例でございますので、全員がこうなしてほしいというものではありませんけれども、例えばこういうシーンが生まれていると、一つ政策の成功になるのではないかと大きな北極星の参考として実現したい学びのシーンというのを言語化してございます。

例えば、探究についてですね、より深く深く学んでいこうとする子どもの姿勢が見えていたりだとか、あるいは少し自信がない子どもでも、フリースペースであったり多様な学びの場があることで、自分なりの自分らしい学びが実現できているだとか、こういう学びのシーンが生まれていると良いのではないかとこのところで言語化しているというところでございます。

そしてこれらのシーンを生んでいくために、その方向性に進んでいくために重点的に取り組むプロジェクトを位置づけてございます。こちらについては、まだ具体的な施策というところに落ちていないというところを先んじてお話しできればと思います。例えば、先生を何人増やすのかとか、あるいは端末をどうするのかとかそこまでの具体

的な施策に落とししていくのは、ここから先という形になりますけれども、大きな方向性として我々が取り組んでいくものとして重点的に取り組むプロジェクトというのを指し示してございます。

例えば新たな学びに対応した学びの実現と新たな時代に対応した学びの実現というところでは、現在のスクールファンドで取り組んでおりますけれども、より推進していくということや、デジタル技術の学びの転換、そして子どもたちの学びの多様化推進というところで、フリースペースや学びの多様化学校等の推進をさらに進めていくというところでございます。

あとは地域の宝物を活かし生涯をかけてもらう機会を作るというところだと、例えばやはり地域にある多様な資源を使って、子どもと学校そして地域と連携しながら学んでいく姿や大人が生涯にわたって学んでいく姿というのがしっかり生まれている状態を作っていくために、地域と学校連携推進、あるいは生涯学習、体験学習の機会充実や歴史・文化の保存・継承・活用等を進めていくというのを記載させていただいてございます。

三つ目でございますけれども多様性を尊重した学びで共生社会を共創するというところだと、実現したい学びとシーンとしても、やはり一人ひとりのしんどい、つらいという思いにしっかり対応しながら個別最適な学びを実現していく、一人ひとりの子どもを取り巻く家庭や周囲の状況についても、しっかりと支援をしていくというところを記載させていただいて、インクルーシブ教育や子育て子育ちの環境整備というところに重点的に取り組んでいくということを記載させていただいてございます。

そして、四つ目、学習者中心の学びを支える環境を整備するというところで、一人ひとりの学習者が、その中心に据えられて学んでいくためには当然、安心して学び続けられる環境が必要であり、重点的なプロジェクトを先にご説明しますが、学校指導運営体制の充実というところで、これは質量ともに十分な教職員の確保や学校運営に対する伴走支援というのを充実させていくということや、B では安心安全で豊かな学校教育環境の整備というところで、施設を中心に一人ひとりの学び手が安心して学べる学校を作っていくということとともに、当然それは学びの環境は学校だけではなく地域における生涯学習基盤の整備ということで、生涯学習センターや図書館など、子どもから大人まで生涯にわたって学び続けられる環境の整備を進めていきたいと考えてございます。

15 ページには附則として、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の3に定める総合的な政策の大綱を指すものであるということや、5年間の効力を有するということが前回の教育大綱を踏まえて記載をしていますが、例えばスケジュールの変更や内容の修正が必要な場合には、この場で議論するということと、記載をさせていただいているというところでございます。

4番のこの教育振興基本計画というところについては次のアジェンダでご説明させていただきますので、今回割愛をさせていただきます。

ディスカッションポイントの②としまして、ぜひ教育大綱の内容についてご意見をお聞かせいただきたいと思っております特に、細かい文言等で気になるところについては個別にご相談いただければと思います。目指す大きな方向性に関するご意見や教育大綱策定に向けた中で期待と不安というところについてご説明いただければ幸いに存じます。

事務局の説明は以上でございます。

**【市長】**ありがとうございました。大きな方向性についてご意見いただければと思います。

**【教育長】**なぜ教育大綱なのかというところだけ少し補足的に押さえておけばと思います。今も教育大綱がございしますが、これは地方教育行政の組織および運営に関する法律という法律に基づいて作る教育に関する大綱、大

きい方向性ですので、作らなきゃいけないものと言えば作らなければいけないものでありますが、そういうものには今回はしたくなく、私自身の中では三つ大きく作る意味があると思っています。一つ目はビジョンとコンセプトというお話がありました。ビジョンというのは北極星のような目指すべきものでコンセプトというのは、コンパスみたいな道しるべになるようなものだと思います。

これを関係者、市民の皆さんや教育関係者の皆さんと、ごく簡潔なペーパーで目線を合わせて、共有できるといいなと思っており、ビジョンとコンセプトの目線合わせをするという目的が一つあると思っています。

二つ目の目的としては、やはり鎌倉が教育に関して、目指すべき方向性、特に重点的な方向性というのを明確にしていくということ、もちろんリソースも限られますし、我々がどこを優先順位上げて特に大事なことだと思いつながらやっていくかということ、重点的な方向性を明確にするというのが二つ目です。

三つ目としてはこの会議自体も市長にお出まじただいて、さらに市長部局の皆さんに音頭を取ってもらっている総合教育会議という場になりますけれども、市の総合計画の検討も今まさに動き始めている中で、その総合計画との関係性が求められますし、あとは子ども施策や教育政策の様々な計画やプランもございます。その間に入る接着剤の役割だと思っています。市全体の計画として様々なプランものというものを間に入るビジョン、コンセプトという糊のような役割になるのではないかなと私は受け止めています。

なので、そのような観点からも皆さんからご意見などをいただければと思います。

**【林委員】**最初に炭火という言葉聞いたとき炭火？と思ったところですけど、私は古い人間なので炭火がどんなものであるかわかるし、家庭の中でどんな役割をしてくれたかもわかります。イメージとしてはすぐ繋がるのですが、私の仕事柄、これを現場に下ろしていった際に、先生方の中にどう伝わるのかなということを一番に考えました。いろいろなお話の中で、5ページにある持続性、多様性、伝播性というこの三つのキーワードが教育現場の業界用語ではないため、世の中一般の方もわかるイメージではないかと思います。そして、それが炭火、鎌倉らしさだとイメージしていくと、この持続性、多様性、伝播性を持っている炭火が、ビジョンとして目指すものになると、自分の中で思ったときに、この言葉とこれからの学校教育がつながり腑に落ちたというところがあります。

次のページの学習者中心の学びのところにある個別最適や、未来の先行投資、自己決定という言葉も業界用語に近く、学校や文科省等々で使われる言葉で、市民の方々にも伝えていくには、この持続性、多様性、伝播性という言葉が非常にしっくりくるのかなと、私は思っているところです。

先日の青少年問題協議会の中で、子ども計画についてのご提案があり、お話を聞いているときに、生涯学び続けるのは、学校の学習者だけではなく、大人も学習者ということ念頭に置いておくと、守られる側から成長して、自分自身が守る側になる、その過程の学校教育を大綱が担うのだなと改めて思ったところです。私達は現場の先生方にそれを理解していただくように伝えていく必要があると思います。学校現場を回ると、伝播性とか持続性とか多様性というのは、既に学校のランドデザインの中に繋ぐとか、思いやるとか、学び続けるという言葉で必ずどこかに入っています。なので、大綱の内容を各現場に即して伝えていけば、先生方が理解して、炭火という言葉が、会話の端々に出てくるのではないかなと期待しているところです。

**【朝比奈委員】**私もこの炭火というキーワードを出していただいた時に、炭火というのは林委員もおっしゃってましたけど、お寺の禅宗の修行道場においては必ず薪で炊事をするし、その薪から出た炭を囲炉裏に移して、そこがだんだんだんだん大きくなっていく1日が終わった時に、その炭には灰を被せて、火事になると困るから消すわけですが、完全に消えないように被せる。次の朝、それを丁寧に灰を広げると、少しだけ炭火が残っていて、それが

またどンドンどンドン大きくなっていく。この繰り返しで失敗して全部消してしまったら炊事している薪のところから持ってくればいいし、途切れることはないです。長期にわたってその場所を留守にする時は、さすがに残していたら危ないので消す作業をするのだけでも、それをちゃんと消して赤い炭火が残っていないことを確かめて大丈夫ですと言って、先輩に点検してもらおうと、小さな炭がまだ残っていたりするわけです。それぐらい炭火というのは、もう粘り強い。いつまでも残っていくそれはどンドンまた広がっていくという、そういうものを想像してもらいたいと思います。少なくともキャンプのときのバーベキューの炭ではない。

イラストがまだ入っていないけれども、ここにバーベキューグリルと炭が残っていたのでは違うわけで、じわっとね、燃える炭火を想像していくと、これはなかなか鎌倉らしい考え方で、素晴らしいなと思っております。

【下平委員】12月6日に小学校の音楽会に参加しました。その現場で一日時を過ごし子どもたちの姿を見ていて、まさにこれはもう実現されているなど感じました。

子どもたちは実にワクワクしていましたし、それから先生の日頃の指導、学校環境、さらに芸術館という場所があり、環境を活かした中での開催でした。生徒には得意不得意も、好き嫌いもあるでしょうけど、学年全体がそういうものも乗り越えて、先生の指導のもと、みんながキラキラ輝いている音楽会になっていたと思います。その中で、まさに炭火がついて、将来そちらに花開くかもしれません。芸術という場面はこういうことが実現しやすい場面なのかもしれないとは思いますが、学校の現場でどんな教科にも、それから社会でも様々な場面でこういうことが起きたら素晴らしいとつくづく感じました。

現状でも、音楽の先生に限らず、個別最適で協働的な共生社会を実現することを先生方が考えながら、取り組んでくださっている、動きは起こっているなどと思います。そこにこの教育大綱が火をつけるような役割が果たせれば嬉しいと思い熱意を込めて、私達も考えているところです。

2点目ですが、先ほど教育委員で話したのですが、国際調査から学力は非常に日本高いということはわかっているのですが、不登校傾向について日本はどうなのかという話になりました。世界の現状は、日本と違って、義務教育という考え方もないし、何日間休んだら何日間登校したらという取り決めもない。日本のように数値化できない世界が多い中で、不登校という捉え方自体、果たしてこういう考え方がいいのだろうかという思いもあります。しかし不登校が増えているということは、現状の学校教育の現場が対応できてない問題もあるのではないかと思います。小学校や中学校の問題だけではなくて、社会人である私達が職場や社会にワクワク参画しているのかと考えると、問題も多々あるように思います。今こそ、私達が変わらなければならない、日本全体が、社会が変わらなきゃいけない世の中になっていると思うのです。そのためにも一人ひとりの様々な知見、様々な力が、共創していくことが協力し合うことが、大切であると感じます。人手もいるでしょうし、予算もかかりますが、そういうところに力を入れて思い切った変革を考えていくときなのだと思います。そのためにも炭火を起こしたいと心から思います。

【長尾委員】教育大綱の炭火のごとく、誰もが学びの火を灯し続け、生涯にわたり心豊かに生きられるまち鎌倉というのは、標語であってはいけないと思っております。この言葉を作るにあたって、教育委員会の皆さん、私達も非常に思いを込めておりますが、これを標語にせずにももちろん子どもたちもそうですが、家族、親御さんですとか市民、行政、皆さんがこの言葉をきちんと自分の胸の中で消化をしながら取り組んでいくということが大事なのだろうなと思っております。

私達も、言葉を作りながら自分の言葉に落とした場合、かなり時間がかかったのではないかなと思っております。この言葉が本当に最適なのだろうか、これが全てを網羅できているのだろうかみたいなどころがあったと思います

が、それを口に出し、会話をし、自分で考え、振り返りみたいなことをしながら、やはりこういう言葉であれば教育大綱としてのポジションとして非常に素晴らしいのではないかと、今、腹落ちをしているような状態です。林委員もおっしゃってましたけれども、現場の先生方や、保護者の皆様ですとか市民の皆様にごこういったことを問い続けながら根付かしていただければと思います。

あと一点、この大綱にかける思いとしましては、教育にかける予算は限られたものだと思っておりますので、ぜひこの大綱の中の言葉にもありましたが、教育の質といったところ、生涯学習の質といったところにも目を向けながら鎌倉市、私達がこの場所で育ってよかった、もしくは子どもを育ててよかったというまちになっていくための基礎の教育大綱になればいいのではないかなと思っております。

**【林委員】**大綱にもある未来の先行投資や、その未来の先行投資は子どもたちへの先行投資ですけれども、先行投資した子どもたちを育てて社会に出したとき、やはり社会が変わってなければ、私達の頑張っているところがなかなか生きていかないですから、一緒に社会も変わってほしいなと思います。

先ほど業界用語と言いましたが、もう指導要領等で使われている言葉ではない言葉でも、その内容が伝えられるような勉強を私どももしていかなければならないということを強く感じています。

一つそれに関わるのですが、人権と平和というこの2文字は、今では、いろいろな世代の方がいるときに、インクルーシブや共生社会等と言われますが、そのスタートはやはり人権であり平和であるということを伝えていくことも大切だと思います。鎌倉市は平和都市宣言をしており、総合計画の中にも平和という言葉が載っています。やはり、人権という言葉も今、求められていることの基本はそこだよということがどこかに表れていると何か安心というところが私にはあります。

**【市長】**これまで議論を重ねてきたところで、おおよその方向性が固まりつつあるのかなと思っております。まさにこの時代に則した形で目指すべき方向性が、教育長の言葉を借りれば北極星のようにビジョンがしっかりと見えるような形になってきているなというふうに感じます。

**【教育長】**長尾委員おっしゃるようにスローガンではないと思っておりますので、市長に報告させていただいた北極星だと思っていて、委員の皆さんからあったように、子どもの話ではないというのも本当に皆様のご発言の通りで、学習者としたのは、当然、学ぶものは子どもだけではなくて、我々も一緒であると思っております。なので、教育委員会、教育文化財部の職員や、教職員も含めて自らの内なる火を燃やし続けて、学び続ける仕事をするとか、労働するというよりはどちらかというと、学び続ける。そういったところを重んじて日々の職務にあたりたいなと思っております。炭火は先ほど市長からもあったようになかなか鎌倉の子どもたちは、かなり学びに向かう力が強い子が多いです。なかなか最初は学びに入っていけない子どももいます。それは、いろいろなモチベーションの理論や学習科学でもあるように、階段を登るように段階的に学びに向かう力を作っていくということが大事だと思っていて、教育の専門職である教職員集団と我々の方が巧妙に火を付ける環境というのをしっかり用意して、内なる火を育てていくというのが大事です。

これもモチベーション理論でよく言われるのが、外発的動機付けと内発的動機付けというのがあります。内発的動機付けというのが、生涯にわたって燃え続ける火になる逆に言うと、外発的動機付けでシールがもらえるからとかテストで怒られるかもしれないからというのは、最初は学びに向かえますが、それが終わってしまうと忘れてしまう学びになってしまう。

そこをこれだけ変化が激しくて不透明な時代を 2100 年という時代まで生きていく子どもたちを育てていると考えれば、やはり常に学び続け変化し続けていかなければならないし、これだけ生成 AI が発達して、苦手な学び方というのは生成 AI の方が得意で、ある意味では情報を集めたり分析したり、まとめたりするのは、圧倒的速度でもうやってくれる中で、そういったところも頼っていくことになるでしょうが、何がしたいのかとか、どんな解くべき問は何なのかという最初の課題設定は、これは人間にしかできないところとするならば、内なる火そのものがやはり大事な時代に確実にになっていく。我々は、そういった炭火の火は特に内なる火にしていくというのは、やっぱり大事なことで無理矢理火を起こして、すぐ消えてしまう火は本質的ではないわけであって、これは子どもも大人も同じで生涯に渡って学び続けるような学習者であるというのを鎌倉では目指していきたいと、そういうスローガンではなくて本当のビジョンだと思っていて、それが市全体のビジョンである共生社会の共創で、そういったところと大いに繋がっていく、その共生社会を育む場である学校というのを良い関係にしていこうというのが仕事だと思っていますので、そういった考え方でやっていきたいなと思います。

炭火の話が多くなりがちではありましたが、学習者中心というののもすごく大事な概念でありますし、その学習者中心というのは、さらに学校現場であったり授業や教育活動の中で実装していくかというのが、重要な論点になっていますので、これは教育大綱から一つブレークダウンしたようなプランであったり、指導の重点というところできっと表現しつつ、この教育大綱を、どのようにそれぞれの現場、現場に実装していくのかというのが、こちらがある意味では、本当の大事な局面でございますので、しっかり私中心にやっていきたいなと思っております。

**【市長】**ありがとうございました。続いてスケジュール、具体的なプランのお話も含めて事務局からお願いします。

**【事務局(教育文化財部次長)】**今のご議論を踏まえて次のパートにも繋がる場所がありますので、1点補足をさせていただきます。まさに標語で終わらせずに教育大綱を具体化させていくという観点で3点重要であると思っております。

1点目が現場に浸透させていく、それを共有していく。ただ単に押し付けるというものではなく、より具体的なところを先生方や学習者と一緒に歩んでいくために、みんなでその内容を理解していくことが重要だと思っております。そのための学校現場や学習者との対話の活動は、今後策定にあたってどんどん進めていければと思っております。2点目が具体的な政策を打っていくというところで、こちらの重点プロジェクトにも大きな方向性を記載しましたけれども、例えば重点プロジェクト一つ目の指導体制の充実というところでも、体制整備していきましょうということで、具体的に何をやるというところはこれからですが、財政当局等とも調整していければと思っております。先生が足りないというだけではなくて、市としてもしっかりと必要な政策を打っていくことに取り組んでいきたいと思っております。3点目が、その施策をただ乱発するだけではなく、しっかりと計画を立てて進めていくというところで、その計画について本日お話したいと思っております。

34、35 ページご覧いただければと思います。現在、左側のような形になっているというのが現状でございます。総合計画にも教育の記載はありますが、その内容が今の教育大綱とあまり連携していない、内容的に相関性がないという状況で、かつその下位計画として、教育プランや生涯学習プランというものを例示してありますが、他にも様々な計画やプランというところが策定されているところでございます。

こちらがそれぞれの連携があまりされていないというところが、正直申し上げて教育委員会としての反省としてあるというところがございますので、今後は、この教育大綱の策定、来年度以降も、総合計画の策定というのを契機に、それぞれしっかりと教育大綱をまさに糊として連携させていただきながらしっかりと計画を立て施策を進めてい

くというのを進めていきたいと考えてございます。

36 ページご覧いただきますと教育大綱とその下に教育振興基本計画とありますけれども、目指す姿やコンセプトというのをしっかり教育大綱で定めながら、具体的に何をしていくのかというところを教育振興基本計画にしっかり落とししていくということをもって、それぞれの政策を体系的に整理していくことに挑戦してみたいなと思っています。国がこういう方針を作ったからこういう計画を作りますとか、こういう施策をやるからそのための計画作りますと個別、個別になっているのを学びは個別最適ではありますけれども、計画自体は全体最適を目指して、体系立てて市民の皆様から見てもこの政策はこの柱のこういうのに位置づいていだからこういうふうに重要なのだなとか、この施策はこの世界を目指すためにやっているのだなというところがわかりやすいようなものを目指していきたいなと思っています。

具体化という意味では、この教育大綱を作ったあとは現場ではなくて、しっかり計画を作っていくところで今後のスケジュールが 38 ページですけれども、まず年度内の教育大綱策定というところに従って、真ん中のこの総合教育会議での議論をしっかりと進めていきたいと思っています。こちらについては、先ほど冒頭申し上げましたが、1月に本日の議論を踏まえた修正版をお示ししまして、一定の了承を得ながら2月の議会においてご議論いただきまして3月に最終的に教育大綱を総合教育会議として決定していくという流れを組みたいと思っています。

それと並行しながらではあります、教育大綱を具体化していくための教育振興基本計画というものを具体化していきます。教育委員会、社会教育委員会の合同開催などを視野に入れながらしっかりと計画をお伝えしていきたいと考えているところでございます。また、こちらは下位計画としての教育プランや生涯学習プランとの関係性を教育振興基本計画として整理するというものでございますけれども、上位計画としての総合計画についてもしっかりとアラインをとっていきたいというところで現状の総合計画の検討状況について企画課長からご説明させていただきます。

**【事務局(企画課長)】**それでは資料3をご覧ください。

総合計画につきましては、新しい教育大綱が令和7年4月からですが、総合計画はその翌年、令和8年4月からスタートするという予定となっております。本市の総合計画は3層構造になっておりまして、一番上に基本構想をその下に基本計画そして実施計画となっております。お手元の資料につきましては、基本構想、基本計画についてまとめておりまして、点線より上部が基本構想になってございます。基本構想につきましては、市の最上位の考え方になり、基本理念、将来都市像は現行を踏襲し、新総合計画策定のための市民対話を踏まえながら将来目標というものを三つ掲げています。

それを受け、基本計画でございます。人口それから土地利用の目指す姿を受けまして、人口減少社会の中で全ての課題解決を行政だけで担うことが難しいという時代になっていくことから、それぞれに合った地域で課題解決をしていく社会として、自分らしく共創できる環境作りというものを、まず基本方針として考えてございます。ここからこの教育と関連する内容として、基本方針の実現にあたりまして、今回の新しい総合計画の基本計画におきましては、先導的・戦略的な取組でございますリーディングプロジェクトを、学校教育や子育てなど子どもを主語とした子どもたちが鎌倉で生まれ育ってよかったと思える環境の整備、そうした取組をリーディングプロジェクトに位置づけたいと考えてございます。この意図ですけれども、そういったプロジェクトに取り組むことによりまして、その地域による課題解決を将来的に行っていくその世代の方々、将来的にまちづくりに携わる関わる方々になっていただきたい、携わっていただきたい、関わっていただきたいそうした思いのもとに子どもを主語とした取組をリーデ

イングプロジェクトに位置づけ、その子どもたちの過ごす環境ですとかまち全体の環境につきましてもは施策体系に沿って粛々と取り組んでいこうという考えで新しい総合計画の検討作業を進めているところでございます。先ほどお話もありました通り、まさに教育大綱それから今、市長部局ではこども計画を作っておりますが、これらとしっかりと連携をしながら最上位計画としても子どもたちの未来ということを意識した計画を進めていきたいというふうに考えてございます。

【市長】この各種計画とプランとの関係性は、教育大綱を作る当初から皆さんからもご指摘いただいて、しっかりと整合性を取っていこうというところでもございましたけれども、こういう形でまとまってきたというところです。

【下平委員】この連携については、これまでも言い続けてきたことですが、今回はタイミングよく鎌倉市の総合計画、子ども計画や様々なプランとも連携が取りやすい時なので、しっかりとその基本になるような、北極星になるような、大綱を作れることは本当に嬉しいなと思います。

さっきふと思い出しましたが、ムツゴロウさんが、人參ぶら下げて走らせるのは教育でなく調教だとおっしゃっていましたが、本当その通りだと思います。外発的な動機ではなく、内発的に走りたくなる思いをかき立てる鎌倉市であれば素晴らしいと思います。

【教育長】企画課長からのご説明も伺って、本当にこういうふうな形で子どもを主語というところを真ん中に置いた、そして、これが市全体の計画ということで、検討が進んでいるということは本当にあんまり私も聞いたことがないですし、素晴らしいことだと思っています。こどもみらい部でもこどもまんなか社会というところを掲げていますし、この度、我々も学習者中心の学びを真ん中に置くというのももちろんですけども、やはり下平委員がおっしゃったような子どもや、学習者自身が自ら幸せになっていく。自ら学びを掴み取っていくという、そこを主語あるいは子どもの視点、あるいは学習者の視点に立つというのが大事だろうなと思います。

まず、我々教育の世界や行政の世界だと何かしてあげるといふ発想にどうしてもなってしまうがちのところがあって、いつも私も反省していますが、やはり幸せになっていくのは学習者自身であり、子ども自身だということをよくよく忘れないようにしながらそちら側の視点に立って施策を組み立てていかなければならない。すごく難しいことを総合計画でもやろうとしているということなのだと思いますが、私は共感と賛同していて全てが一つの線の上に乗った感じがするなと思っています。これは共生社会の共創というのを目指す鎌倉の真ん中に子どもあるいは学びというのが置かれるというのは、鎌倉の価値を上げるものではないかと思っています。

【林委員】私は大学で教員採用試験の論作文の指導もしているのですが、書くときに、「せる」「させる」という言葉を使わないで書くことを常に言っています。「せる」「させる」を使った文章を書いているとそういう教員になるので、子どもたちが何々ができるように私はこういうことをするというように、子どもが何々ができるように、興味を持つことができるように、理解できるようにとか、子どもを主語にして、教師が子どもに「せる」「させる」は絶対使わないでと言っています。学生は全部書き直しをして、それを読み返すと、すっきりした感じで帰って行きます。そういう教員になってほしいし、世の中も「せる」「させる」ではなく、子どもたちが自分で自らやれるような環境や言葉がけをいつもイメージして動いていけたらと思っています。

【市長】教育大綱から始まってきた学習者中心の学びという理念ではありますが、この総合計画を作っていく中で

も、子ども中心ということをあえて置きながらしっかりとこれを進めていこうということで位置づけたところですけども、これはやはり全ての市の政策にもいえることだというふうに思ってます、障害者の政策、高齢者の政策やはりどうしても何かをしてあげる、何かこういうものを作ったらきつといいんじゃないかという視点で政策作りがちですけども、そこには高齢者の幸せがどうあるべきかということが中心にないと、全てが与えるものになっていってしまうところなので、やはり我々の取組においては、その視点ということを絶対に忘れてはならない。

そこを基本にして、様々な施策展開を作っていくということをしつかりと改めて肝に銘じながら、この総合計画というところも作り上げていきたいなと思っているところでございますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは他にはよろしいでしょうか。事務局からなにかありますでしょうか。

**【事務局(企画課長)】**本日はありがとうございました。先ほど教育文化財部次長からもお話がありましたが、次回1月にもう一度この総合教育会議を開催させていただきたいと考えてございますので、よろしく願いいたします。年度内の教育大綱改定に向けまして、引き続き事務局でも必要な作業を進めてまいります。

**【市長】**では、他によろしいでしょうか。

これもちまして令和6年度第2回目の鎌倉市総合教育会議を閉会いたします。ありがとうございました。